久々利西山横穴墓

「花フェスタ'95」関係造成工事に伴う
埋蔵文化財の発掘調査報告書

岐阜県 可児市教育委員会

1994.3

序　文

志野や織部など、数々の美濃焼の名品を生み出した可児市には、一万年以上も前から私たちの祖先の営みがあったことが知られています。むろんこの営みは、現在に至るまで脈々と続き、今や可児市は、人口８万５千人を超える田園文化都市として、めざましい発展を遂げようとしています。

このたび、県営可児公園とその周辺が、“花フェスタ'95”の開催に向けて開発されることになり、現状保存部分を除き、発掘調査が必要となりました。

この地区、久々利川水系一帯は、100基を優に超える横穴墓が造営されたことで著名であり、岐阜県においては特色ある場所といえます。県下最大規模を誇る羽崎中洞横穴墓や、二野鍋煎横穴墓群、大森皿屋敷横穴墓群は、県の史跡に指定され保護されています。

横穴墓の“謎”は、今だ全てが解明された訳ではありませんが、本調査が少しでもその手だてになれば幸いに存じます。本調査に当たりましては、多くの皆様にご協力を賜わりました。末筆ながら、心よりお礼申し上げます。

平成６年３月

可児市教育委員会

教育長　渡邊　春光

例　　言

1．本報告書は、岐阜県可児市久々利字西山2808番地の4に所在した、西山横穴墓（遺跡番号G34K04855）の発掘調査に係るものである。

2．発掘調査は、駐車場用地の造成工事に伴う緊急調査で、事業主体者である可児市からの依頼を受け、市教委が実施し、経費は可児市が負担した。

3．発掘調査の体制は次のとおりである。

可児市教育長	渡邊　春光	現場作業員（順不同）			
教育(総務)次長	可児　征治	須渕　巌	富成　正秋	東　良平	後藤　弘
社会教育課長	前田　正光	濱島　勲	松川　一雄	田中　正三	荒川　博
同　課長補佐	奥村　幸彦	古賀　次夫	水野テツ子	浜地　清美	岡田　智子
同　文化係長	中島　繁昇	岩田　純雄	佐藤　秀夫		
同　調査担当	長瀬　治義	調査協力			
同　庶務担当	水野　真季	可児市総務部企画調整課	大日本土木㈱		

4．本書の編集、執筆は、長瀬が担当した。

5．地形測量は1/50、横穴墓の実測は1/10で行ない、標高数値は造成工事のBMより引いた。

6．発掘調査の関係資料は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）が保管している。

凡　　例

1．方位は磁北である。

2．遺構の長さや幅、高さ等の計測値は、水平もしくは垂直方向の値である。

3．本文中の右、左の呼称は、奥壁に向かっての方向である。

目　　次

序文　例言　凡例

I．発掘調査に至る経緯……………………1

II．久々利西山横穴墓

1．立地と環境……………………………2

2．久々利川水系における横穴墓の分布…3

3．久々利西山横穴墓………………………9

図　版……………………………………13

Ⅰ、発掘調査に至る経緯

かねてより計画のあった"花フェスタ'95"の開催が、平成7年4月26日と決定し、県営可児公園内の花トピアを中心とする付近一帯が、開発されることになった。この博覧会の駐車場用地については、跡地利用の問題もあり、既に可児市が公有化している隣接地の山林が充てられることになり、その造成も市事業としての実施が具体化したのである。

市教委は、開発担当部局からの依頼を受け、開発区域内の周知の遺跡を指摘するとともに、この全域を現地踏査（平成5年1月20日）し、その所在確認と未周知の遺跡の分布調査を行なった。分布調査の結果は以下のとおりである。

G34K04855	西山横穴墓	1基確認	区域内
G34K04856～61	我田1～6号横穴墓	4基確認	区域外
G34K04862・63	猿洞1・2号横穴墓	2基確認	区域内
G34K04864	庚申洞横穴墓	5基確認	区域外
G34K07570	久々利西山横穴墓	未確認、西山横穴墓と重複の可能性大	
(――)	不明遺構（「キノエサマ」）	1ケ所	区域内

この結果に基づき、その保存について開発部局と協議を重ねた結果、区域内の猿洞1・2号横穴墓は保存緑地として現状保存の措置が採られることになったが、西山横穴墓については、全体の造成計画に及ぼす影響が過大であるため、事前に発掘調査を行なって記録保存を図ることは、やむを得ないとの結論に達した。また、試掘の必要な数ケ所についても同様に実施することとした。

尚、猿洞1・2号横穴墓の「猿洞」は、これの立地する北の洞（谷）を言い、庚申洞横穴墓の「庚申洞」は、西山横穴墓の立地する洞(谷)を指すのが地元での呼称である。G34K04855と07570は重複して名付けられたものと考えられ、以下の記述においては、前者に改めて「久々利西山横穴墓」の名称を与えることにする。「久々利」は大字、「西山」は小字名である。

文化財保護法（以下「法」）に係る手続きは、以下のとおりである。

法57条の3第1項の手続き

市教委発　平成5年9月10日付　可教社第256号（通知書の進達）

県教委発　平成5年9月29日付　教文第662号の2（指示書の伝達）

法98条の2第1項の手続き

市教委発　平成5年12月1日付　可教社第341号（発掘調査の通知）

文化庁発　平成6年4月27日付　6保記第17号（通知書受理の通知）

県教委発　平成6年5月11日付　教文第218号（通知書受理の伝達）

ここにおいて、市教委主体の発掘調査を平成6年1月10日から1月20日まで実施した。

II、久々利西山横穴墓

1、立地と環境

久々利西山横穴墓は、行政区として岐阜県可児市大字久々利小字西山2808番地の4に所在した。丘陵裾の酒井集落からは、約300m山道を入った谷の斜面である。本横穴墓が立地する久々利川水系は、100基を優に超える横穴墓の群集域として有名であるが、その中でも、最も上流（東側）に造営された一群に含めて考えてよいものと思われる。第1図には久々利川水系の古墳分布を、第2図にはこの一群の分布を示した。

さて、可児市は岐阜県の概ね30km東方に位置し、大河川で言えば木曾川流域の左岸に当たる。当地は、基盤のチャートを主とする中・古生層が陥没してできた、可児・美濃加茂盆地の南部に当たり、市域の東・西辺部はこの中・古生層が露頭し、標高300mを超える可児丘陵の最高所を形成している。南部一帯は、第三紀鮮新世の古木曾川の氾濫による堆積物である、土岐砂礫層が覆う。ここでは、平安時代以降、美濃窯の大発展を引き起こした。市北部一帯の平地は、主に第四紀に属する木曾川の段丘堆積物から成り、木曾川に沿って低・中・高位の三段が認められる。これらの段丘面は、縄文時代からの営みの場として利用されてきたが、古墳に限れば、前半期の前波古墳群は中位段丘面に、後半期の土田渡古墳群や川合古墳群は、標高70～85mの低位段丘面に展開されたものである。無論、当可児地域の古墳文化の発展が、古東山道ルートの沿線であることと木曾川の水運に大きく関わっていることは言うまでもない。

久々利川水系の横穴墓群は、標高110～180m付近に露頭する、第三紀中新世の平牧層に穿たれたものである。平牧層は主に凝灰質砂岩から成り、石棺製作集団の移住に伴い当地に石切場が開拓され、家形石棺製作の舞台ともなった。昨今、この横穴墓造営集団と石棺製作集団の有機的関係が論じられ、木曾川中流域へ進出してゆく石棺集団と川原石積石室の造墓集団においても、何らかの提携が推定されるようになった。

先述のように、久々利西山横穴墓は酒井集落の奥、丘陵支脈の南斜面、標高146m付近に立地する。谷底からの比高差は約16mを測り、かなりの高所かつ急斜面である。久々利川水系全体の中でみれば、別の支脈に群集する猿洞・庚申洞・我田・岡本山横穴墓群との関連で把えられるが、他にはほとんど稀な単独立地という指向性を示す。久々利川が東西に開析した細長い平地が、彼らの生活基盤の一部であったことは疑いないが、どこまで石棺製作と関わっていたのかは不詳である。尚、本横穴墓から久々利川を隔てた南の丘陵では、江戸時代に久々利銅鐸の出土をみる。

※参考文献

可児町「地質」『可児町史』（通史編）1980

拙　稿「川合古墳群」『川合遺跡群』　可児市教育委員会　1994

2、久々利川水系における横穴墓の分布

久々利川水系の横穴墓は、現在のところ106基を数える。これらは、大局的に見ればその分布から5群に分けられる。本横穴墓の所在する久々利地区（酒井・我田地区）と柿下地区、二野地区、羽崎地区、大森地区（皿屋敷地区）がそれであり、ほぼ現在の大字の境と合致する。他にひとつ離れて下切地区にもあるが、第1図の範囲からははずれている。市内で横穴墓がみられるのは当流域に限られるが、県内においては他に、高山市、御嵩町、瑞浪市にも分布している。但し、その数は可児地域の当流域には遠く及ばない。

久々利地区

20基確認されている。通称岡本山の南斜面に立地する岡本山横穴墓群（8基）と、津島神社付近に立地する我田横穴墓群（4基以上）、庚申洞横穴墓群（5基以上）、猿洞横穴墓群（2基）、そして単独立地の西山横穴墓がそれであり、微視的には5群に区分可能である。横穴墓のみによって構成されている。いずれも頭に「久々利」を付けて呼称する。

羽崎地区

横穴墓23基と円墳15基で構成される羽崎古墳群は、両者が混在する点で特異であり、家形石棺は相方で採用されている。横穴墓は、大洞横穴墓群（5基）、山寺横穴墓群（5基）、中洞横穴墓群（2基）、羽崎横穴墓群（7基）、中央が峰横穴墓群（4基）などと呼ぶが、微視的には6群に区分可能である。昭和54年に測量調査された県史跡の中洞1号横穴墓は、全長14m以上、玄室高2.9mを測り、圧巻である。[(1)] この他に4基が発掘調査されている。[(2)] 羽崎横穴墓群の他は、頭に「羽崎」を付けて呼称する。

柿下地区

横穴墓30基が確認できた。[(3)] 横穴墓は大きく3群、微視的には7群に分かれる。大区分の3群は、通称西洞の東斜面に立地する西洞横穴墓A群（18基）と、そのすぐ東の谷の東斜面に立地する西洞横穴墓B群（9基）、そして柿下川を挟んだ向かいの斜面に立地する熊野西横穴墓群（3基）である。久々利地区同様、横穴墓のみによって構成される古墳群と考えてよい。いずれも頭に「柿下」を付けて呼称する。

西洞横穴墓A群は、更に4群に区分可能で、谷の入口から11基、2基、4基、1基のまとまりをみ、築造位置の高さから、上下2列に並ぶ部分もある。また、A－5号横穴墓は奥壁に、A－11号横穴墓は奥壁と右側壁に造り付けの棚を設けている。規模の大小隔差も確実に存在し、A－13号横穴墓（柿下猿洞横穴墓、或いは狐塚ともいう）に至っては、全長約14mを誇り、羽崎中洞1号横穴墓に匹敵する。また、これのみ南方向に開口している。

西洞横穴墓B群は、更に2群に区分可能で、谷の入口から6基と3基のまとまりをみる。A群同様に大小の規模隔差が認められ、B－3号横穴墓には棚が造り付けられている。奥の一群、B－

7～9号横穴墓は南向きに開口するが、他は東斜面に造られており東面する。

熊野西横穴墓群は3基を確認した。かなりの高所の南西斜面に並んでいる。

二野地区

横穴墓24基と円墳2基を確認した。円墳は、横穴式石室の秋葉神社古墳が単独立地し、猿洞古墳は横穴式石室ではないかも知れない。横穴墓は大きく、鍋煎横穴墓A群（3基）と鍋煎横穴墓B群（14基）、東段横穴墓（1基）、南山横穴墓群（6基）の4群に分けられるが、微視的には6群に区分できる。尚、県指定史跡の二野鍋煎横穴墓群のように、頭に「二野」を付けてそれぞれを呼ぶ。

鍋煎横穴墓A群は、工場用地内に残る。比較的大型のもので、A－1号横穴墓は全長約10ｍを測り、棺座と棚を造り付けている。A－2号横穴墓にも棚をみる。

鍋煎横穴墓B群は、A群の東の谷に立地し、谷の入口から11基と3基（以上）のまとまりをみる。特に大型のものはない。最も奥のB－13・14号横穴墓は、南に開口する。

東段横穴墓は、B群と同じ谷の入口付近にひとつ離れて立地する。B群との間にまだ存在した可能性もあり、同一の群なのかも知れない。

南山横穴墓群は、羽崎古墳群の南正面に位置し、比較的谷の入口に並んだ5基と、やや奥まった所にある、南に開口する1基に区分できる。

柿下地区と同じように、二野地区においてもそのほとんどが東斜面に造られている。

大森地区

久々利川の支流、大森川が合流する地点に立地する。南斜面に上下2段にわたり、8基が現存している。県指定史跡として保存されているが、小規模なものが多い。下切地区にある1基を除けば、久々利川水系における最も下流に位置する群である。大森皿屋敷横穴墓群と呼ぶ。

以上、久々利川水系の横穴墓の分布をみてきたが、立地や分布状況などから推察できることを記して、まとめにかえる。

立地と分布

その分布状況から、現在のほぼ大字を単位としたグルーピングを行ったが、これによれば20～30基で群を形成するのが一般的と言える。この5群は、大森地区を除けば、それぞれ更に5～7群に小区分でき、5～7の小集団が1つの地区（集落）を形成し、5つの地区（集落）が久々利川系を経営していた可能性を見い出した。その集落の一方の基盤は、当時の久々利川の左右両岸に開かれた水田経営にあると思われるが、他方では、石棺製作や竪穴式住居内のカマドの袖に使う石材の切り出し等を担っていた[4]可能性がある。言わば、半農半工の性格が推定できよう。

横穴墓の立地状況は、いずれも尾根に近い高所に造られている。急な斜面がほとんどで、開口方向は、東・南東・南方向が一般的である。谷の斜面に造られたものは、右岸（久々利・羽崎地

区）では谷に入って左側の斜面に、左岸（柿下・二野・大森地区）では谷に入って右側の斜面に、ほぼ決まって造られている。そこには規則性をも看取することができる。また、谷の最奥や谷ではない斜面に造られたものは、南面するものが多い。

羽崎地区においては、横穴墓と墳丘を有する古墳の混在がみられた。これらは、凝灰質砂岩の露頭の有無という制約はあるにしろ、微視的には墓域が画されているように思える。しかし、日吉古墳や日吉神社東古墳、大洞４号墳、不孝寺塚古墳のように、墳丘を有する古墳にも石棺が用いられていたり、切石を使い、或いは石室構築に際して岩盤掘り込みを行なうなど、横穴墓被葬者との友好的関係を示す例が多い。畿内からの石棺製作集団の移住に当たっては、既存の集落の中へも同化し、久々利川水系全体へその生活基盤を広めていったのではないだろうか。半農半工の性格を推定する所以である。

構造と規模

久々利川水系の横穴墓の、平面・断面形態については、羽崎地区のものをモデルに、亀谷泰隆氏が７形態に分類している。[2]この検討は、またの機会に譲るが、基本的には次の３要素の組み合わせである。(1)玄室と羨道の区別の有無、(2)天井がドーム状か隅丸か角ばるか、(3)玄室の天井高が羨道のそれより高いか変わらないか。これらの相違は、同一地区の同一支群においてもみられ、各々の群の特徴を指摘するには至っていない。

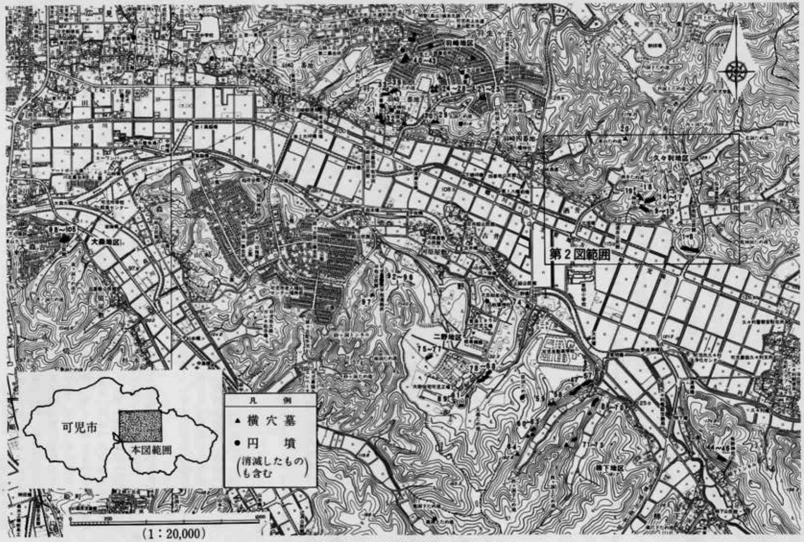
玄室の構造においては、造り付けの石棺を有するもの（羽崎中洞横穴墓）、造り付けの棺座や棚を有するもの（二野鍋煎A－１号横穴墓など６基）が注目に値する。規模的には、大・中・小・極小の４段階程度に分類可能で、上記の造り付け構造は、大型のものが採り入れている。規模的にみれば、各地区単位、或いは支群単位で盟主的な横穴墓を指摘できる可能性もあり、半農半工の集落の中にも、川合古墳群でみたような階層隔差[4]を把えることができそうである。

註

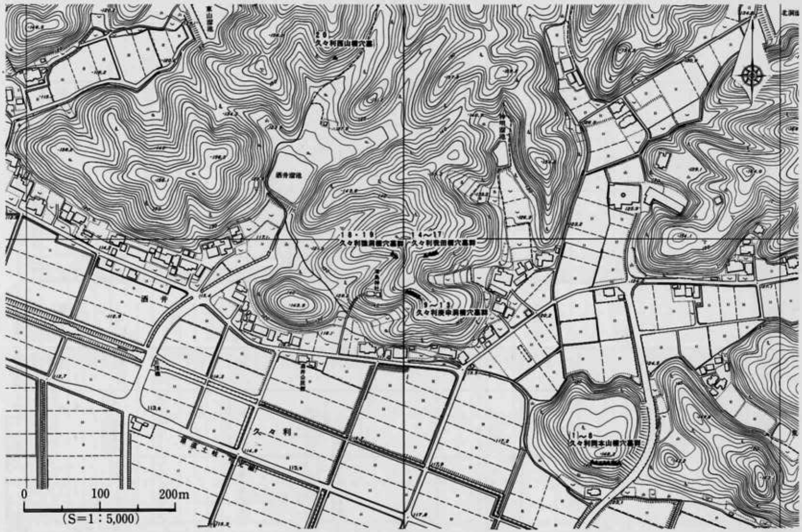
(1)　可児町『可児町史』（通史編）1980
(2)　可児市教委『羽崎古墳群』1985
(3)　柿下地区と二野地区の大部分については、平成５年１月～２月の２日間、県文化財保護センターの小谷和彦氏の協力を得て、再分布調査を行なった。他の地区についても、これ以降筆者が再踏査している。
(4)　可児市教委『川合遺跡群』1994

※　以下は、川村金之助氏の報文に基づく。「美濃可児郡の横穴」『東京人類学雑誌』第180号　1901、「美濃国可児郡平牧村大森ノ横穴」『東京人類学雑誌』第189号　1901

川村氏の報告によれば、明治34年の時点で、久々利水系に102基以上の横穴墓が数えられ、大森皿屋敷横穴墓群中の２基からは、多数の土器と直刀が出土したという。横穴墓の数は、大森地区（字山崎４基、字大畑２基、字北ノ洞２基、字砂ノ洞２基、字吹ヶ洞４基、字竹ノ腰１基、字黒明２基、字宮町１基、字皿屋敷17基）合計35基、二野字鍋煎14－５基、羽崎字中央ケ根７－８基、久々利字岡本17基、久々利我田19基、柿下10基であり、久々利川水系におけるその実数は、久々利地区と大森地区で増え、開口するものだけでも総数150基を超えるものと考えてよい。今後、大森地区の聞き取りや分布調査を進める。



第1図　久々利川水系の古墳分布



第2図　付近の地形と横穴墓の分布

第1表　久々利川水系の横穴墓一覧表

	地区	(仮) 名称	台帳名称	遺跡番号	特記事項
1	久々利地区	久々利岡本山1号横穴墓	岡本山古墳 岡本横穴古墳	G34K04865 〃 04866	台帳は総称かつ重複
2		〃 2号 〃	岡本山2号横穴墓	〃 07563	
3		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 07564	
4		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 07565	
5		〃 5号 〃	〃 5号 〃	〃 07566	
6		〃 6号 〃	〃 6号 〃	〃 07567	
7		〃 7号 〃	〃 7号 〃	〃 07568	
8		〃 8号 〃	〃 8号 〃	〃 07569	
9		久々利庚申洞1号横穴墓	庚申洞横穴古墳	〃 04864	
10		〃 2号 〃			
11		〃 3号 〃			
12		〃 4号 〃			
13		〃 5号 〃			
14		久々利我田1号横穴墓	我田1号横穴古墳	G34K04856	
15		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 04857	
16		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 04858	
17		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 04859	台帳には6号まで有
18		久々利猿洞1号横穴墓	猿洞横穴1号古墳	〃 04862	
19		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 04863	
20		久々利西山横穴墓	西山横穴古墳 久々利西山古墳	〃 04855 〃 07570	H・6発掘調査 台帳は重複か
21	羽崎地区	羽崎大洞1号横穴墓	羽崎大洞1号横穴墓	G34K07526	S.56発掘調査
22		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 07527	〃
23		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 07528	〃
24		羽崎山寺1号横穴墓	羽崎山寺横穴1号古墳	〃 04778	
25		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 04779	
26		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 04780	
27		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 04781	
28		〃 5号 〃	〃 5号 〃	〃 04782	
29		〃 6号 〃	羽崎山寺6号横穴墓	〃 07523	
30		〃 7号 〃	〃 7号 〃	〃 07524	
31		羽崎中洞1号横穴墓	羽崎中洞古墳	〃 04784	県史跡,造り付け石棺,棚
32		〃 2号 〃	〃 横穴古墳	〃 04783	
33		羽崎1号横穴墓	羽崎1号横穴墓	〃 07509	
34		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 07510	
35		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 07511	
36		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 07512	
37		〃 5号 〃	〃 5号 〃	〃 07513	
38		羽崎中央ヶ峰1号横穴墓	羽崎中央ヶ峰横穴古墳	〃 04777	
39		〃 2号 〃	羽崎中央ヶ峰2号横穴墓	〃 07529	
40		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 07530	
41		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 07531	
42		〃 5号 〃	〃 5号 〃	〃 07532	
43		〃 6号 〃	〃 6号 〃	〃 07533	S.57発掘調査
44	柿下地区	柿下熊野西1号横穴墓	柿下熊野西横穴古墳	G34K04873	
45		〃 2号 〃			
46		〃 3号 〃			
47		柿下西洞A-1号横穴墓	西ヶ洞横穴古墳 柿下西洞横穴1号横穴	G34K04799 〃 04820	台帳は重複か
48		〃 A-2号 〃	柿下西洞横穴2号横穴	〃 04821	
49		〃 A-3号 〃	〃 3号 〃	〃 04822	
50		〃 A-4号 〃	〃 4号 〃	〃 04823	
51		〃 A-5号 〃	〃 5号 〃	〃 04824	造り付けの棚
52		〃 A-6号 〃	〃 6号 〃	〃 04825	
53		〃 A-7号 〃	〃 7号 〃	〃 04826	
54		柿下西洞A-8号横穴墓	柿下西洞横穴8号横穴	G34K04827	
55		〃 A-9号 〃	〃 9号 〃	〃 K0828	
56		〃 A-10号 〃			
57		〃 A-11号 〃			
58		〃 A-12号 〃			
59		〃 A-13号 〃	柿下猿洞横穴古墳	G34K04819	[illegible]、大型
60		〃 A-14号 〃	柿下西洞横穴10号横穴	〃 04829	
61		〃 A-15号 〃	〃 11号 〃	〃 04830	
62		〃 A-16号 〃	〃 12号 〃	〃 04831	
63		〃 A-17号 〃			
64		〃 A-18号 〃			
65		〃 B-1号 〃	柿下西洞横穴13号横穴	G34K04832	
66		〃 B-2号 〃			
67		〃 B-3号 〃	柿下西洞横穴14号横穴	G34K04833	造り付けの棚
68		〃 B-4号 〃	〃 15号 〃	〃 04834	
69		〃 B-5号 〃	〃 16号 〃	〃 04835	
70		〃 B-6号 〃	〃 17号 〃	〃 04836	
71		〃 B-7号 〃			
72		〃 B-8号 〃			
73		〃 B-9号 〃			
74	二野地区	二野東段横穴墓			
75		二野鍋煎A-1号横穴墓	鍋煎横穴1号古墳	G34K04801	県史跡、棺座と棚
76		〃 A-2号 〃	〃 2号 〃	〃 04802	〃 ,造り付けの棚
77		〃 A-3号 〃	〃 3号 〃	〃 04803	〃
78		〃 B-1号 〃	〃 4号 〃	〃 04804	〃
79		〃 B-2号 〃	〃 5号 〃	〃 04805	〃
80		〃 B-3号 〃	〃 6号 〃	〃 04806	〃
81		〃 B-4号 〃	〃 7号 〃	〃 04807	〃
82		〃 B-5号 〃	〃 8号 〃	〃 04808	〃
83		〃 B-6号 〃	〃 9号 〃	〃 04809	〃
84		〃 B-7号 〃	〃 10号 〃	〃 04810	〃
85		〃 B-8号 〃	〃 11号 〃	〃 04811	〃
86		〃 B-9号 〃	〃 12号 〃	〃 04812	〃
87		〃 B-10号 〃	〃 13号 〃	〃 04813	〃
88		〃 B-11号 〃			〃
89		〃 B-12号 〃	鍋煎横穴14号古墳	G34K04814	〃
90		〃 B-13号 〃	〃 15号 〃	〃 04815	〃
91		〃 B-14号 〃	〃 16号 〃	〃 04816	〃 台帳では別にもう1基有
92		二野南山1号横穴墓			
93		〃 2号 〃			
94		〃 3号 〃			
95		〃 4号 〃			
96		〃 5号 〃			
97		〃 6号 〃			
98	大森地区	大森韮屋敷1号横穴墓	大森韮屋敷横穴1号古墳	G34K04788	県史跡
99		〃 2号 〃	〃 2号 〃	〃 04789	〃
100		〃 3号 〃	〃 3号 〃	〃 04790	〃
101		〃 4号 〃	〃 4号 〃	〃 04791	〃
102		〃 5号 〃	〃 5号 〃	〃 04792	〃
103		〃 6号 〃	〃 6号 〃	〃 04793	〃
104		〃 7号 〃	〃 7号 〃	〃 04794	〃
105		〃 8号 〃	〃 8号 〃	〃 04795	〃
106	下切	下切宮坂洞横穴墓			

※実査による。但し、久々利地区と大森地区は、今後の精査により増加が見込まれる。明治34年、川村氏報告による数は、久々利地区36基、羽崎地区7-8基、柿下地区10基、二野地区14-5基、大森地区35基である。

3、久々利西山横穴墓

経　過

丘陵支脈の南斜面の比較的尾根に近い場所、比高差約16ｍを測るかなりの高所に位置する本横穴墓の調査作業は、難を極めた。この種の占地、選地状況は、他の横穴墓のそれに共通するものである。本横穴墓は、古くから開口していたらしく、その存在は知られていた。しかし、単独立地という稀な状況であるため、付近に未確認の横穴墓の存在も予想され、周辺７ケ所についても試掘を行なった。しかし、新たな発見には至らなかった。また、眼下の裾部には、地元の人が「キノエサマ」と呼んで祀った、直径３ｍ、高さ1.5ｍ程度の土盛り状の遺構があり、この調査も合わせて行なった。「キノエ」とは、十干の第一位「甲」のことであろうか。そうであれば、甲子の夜に大黒天を祀っていたのかも知れない。しかし、これらが立地する谷（洞）は、地元では庚申洞と呼ばれ、その呼び名は、遠い昔の庚申信仰に根ざしているようだ。とすれば、「キノエ」は、「カノエ」のなまりなのか。

調査は、尾根から命綱を10本垂らし、それに託して、横穴墓周囲の表土剥ぎ作業と内部の堆積土除去作業を併行して行なった。表土は、数cmから数10cmの形成をみるが、凝灰質砂岩の岩盤が露頭する部分もあった。横穴墓内部には、入口付近で約１ｍ、玄室部分でも約50cmの流土層の堆積をみ、副葬遺物の残存が期待された。

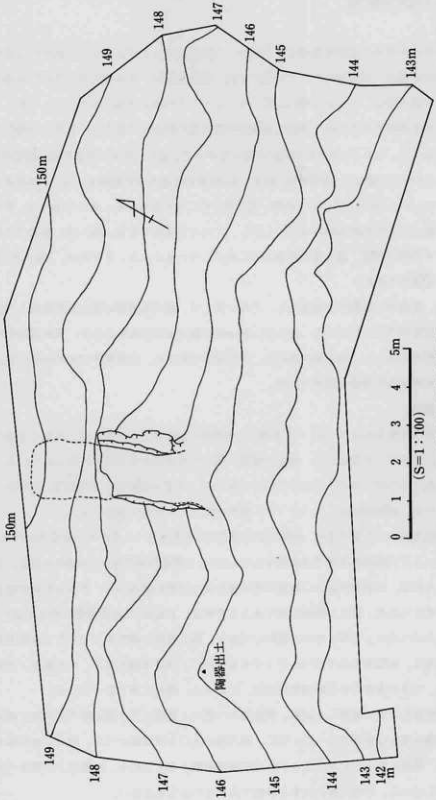
遺構と遺物

本横穴墓の主軸方位はN－26°－Wを測り、南南東に開口する。平面形は、羨道と玄室の境がほとんど明示されず、立面的には、奥壁と側壁、壁と天井も境がなく隅丸に造られている。久々利川水系における１類に該当するものであり（第５図）、玄室の横断面が半円形で、天井がドーム状を呈している。規模的には、大・中・小・極小の中で、小規模に該当しよう。

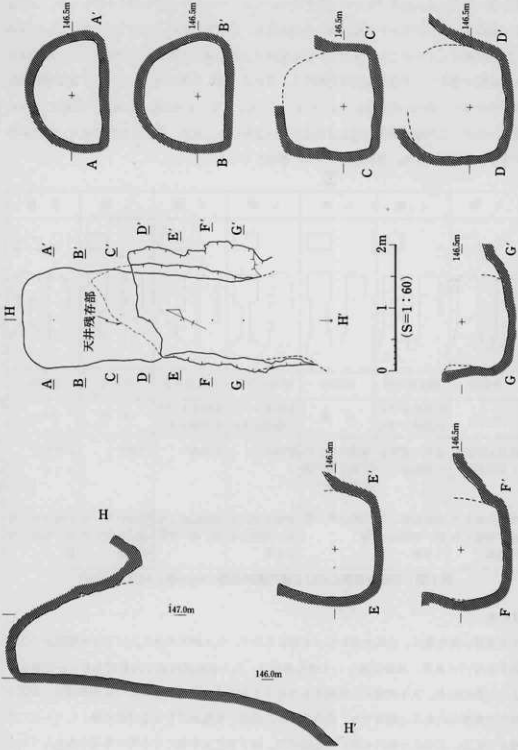
東側の壁は途中で欠損するが、西側の壁の遺存から判断すると、床面の主軸全長4.65ｍを測る。床面幅は、ＡとＢ断面の中間で最大値をとり1.6ｍ、Ｆ断面付近では1.2ｍ程度を測る。目を凝らしてよくみれば、Ｂ断面付近とＣ断面付近に僅かなくびれが認められ、どちらかが玄室と羨道部の境とも考えられる。仮にＣ断面付近であるとすれば、玄室長1.5ｍ羨道長3.15ｍとなろう。

床は、入口へ向かってゆるやかに傾斜しており、特に段差を設けることもなく自然地形へ連らなる。床面は、両壁際で若干レベルアップするものの、ほぼ平坦である。天井高は、奥壁部分で50－60cm、天井の残存するＣ断面中央では、1.45ｍと、徐々に高くなっている。

床面や壁面を丁寧に清掃した結果、西側壁の一部に、掘削に伴う築造時の工具痕を確認した。また、遺物の残存は皆無であった。但し、横穴墓の入口とほぼ同レベル、西へ５ｍの地点は、地形が窪み、平坦になっており、ここから江戸時代末期と考えられる、灰釉のぐい呑み（写真）が１点出土している。本横穴墓に対する供物であったのかも知れない。

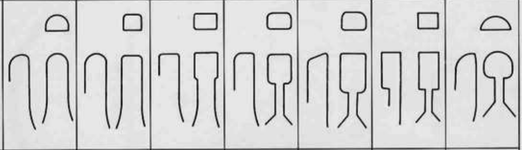


第３図　久々利西山横穴墓　調査後測量図



第4図　久々利西山横穴墓実測図

横穴墓の眼下にみられた「キノエサマ」については、マウンドの断ち割りを行なった。この過程で、直径約３ｍのマウンドの裾には、山側を除き、凝灰質砂岩の人頭大ブロックを２－３段積んだ石垣がめぐっていること、マウンドの土層は人工的な盛土であることが判明した。石垣は高さ50cm程度が遺存し、平面形は半円を程する。盛土は３層に分層可能で、下部の２層は凝灰質砂岩の小片を多く、或いは少し含み、堅くしまっていた。マウンドの頂部から地山の岩盤までは140cmを測ったが、この面には何ら加工は為されていなかった。また、遺物も皆無であり、時代を特定するには至らなかった。近世以降のものと想像している。

	１　類	２　類	３　類	４　類	５　類	６　類	７　類
							
玄室	半円形	隅丸長方形	正方形	隅丸正方形	隅丸長方形	長方形	楕円形
天井	ドーム	丸味をおびるが頂部は平ら	平　面	丸味をおびるが頂部は平ら	丸味をおびるが頂部は平ら	平　面	ドーム
羨	玄室と区別なく前庭部へ	玄室と区別なく前庭部へ	玄室に対しわずかに幅が減じ前庭部へ	区別あり	区別あり	区別あり	区別あり
道	中央が峰６号墓／羽崎山寺４号墓	羽崎大洞２号墓／羽崎山寺１号墓	羽崎大洞１号墓	羽崎中洞２号墓／羽崎山寺３号墓	羽崎山寺６号墓／同７号墓	羽崎中洞１号墓／羽崎山寺２号墓	羽崎大洞３号墓／羽崎４号墓

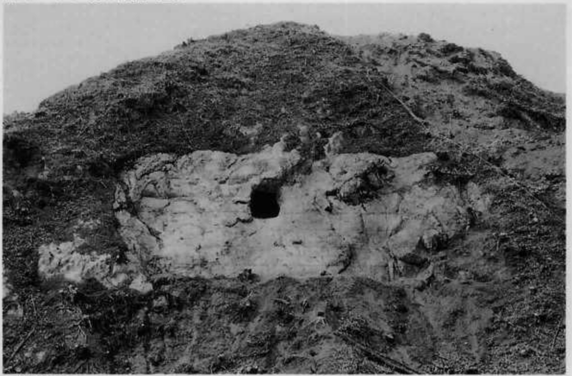
第５図　羽崎古墳群における横穴墓の分類（同報告書より転載一部改変）

まとめ

久々利西山横穴墓は、主軸全長4.65ｍを測るもので、久々利川水系においては小規模かつ１類に属するものである。単独立地という稀な選地は、久々利地区内部での要因を考えれば事足りるように思われる。久々利地区に展開する少なくとも20基の横穴墓被葬者の生活基盤は、石工と農耕の半農半工にあると推測され、現在の酒井、我田、原見地区を主な活動の場としていたことが考えられる。この久々利川を挟んだ正面には、柿下地区を本拠とする別の集落が存在していたのだろう。本横穴墓の造営時期は不詳であるが、川合狐塚古墳の家形石棺にみるように、６世紀中頃にはこの地へ石棺製作集団の移住があったようで、これ以後７世紀末までの間と考えられる。

図　　版

図版1　久々利西山横穴墓(1)



調査区全景

横穴墓正面

図版2　久々利西山横穴墓(2)

右前方より

床　面（内部より）

図版３　久々利西山横穴墓(3)

奥壁〜右側壁

左側壁〜奥壁

図版４　久々利西山横穴墓(4)

左側壁

左側壁の工具痕

図版5　遺物と「キノエサマ」

灰釉グイ呑（横穴墓左側出土）

「キノエサマ」現況

断面と石垣

久々利西山横穴墓発掘調査報告書

平成6年3月31日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
岐阜県可児市広見1－1
☎ (0574) 62－1111

印刷所　株式会社 太洋社